

ふたごの平等感

以前、下の娘（当時小学6年生）が遅くまでテレビを見ている上の娘（当時中学2年生）を引き合いに出して、「オネエは、遅くまでテレビを見ているのに、わたしは早く寝なくてはいけないのはズルイ」とテレビを遅くまで見ることの同権を主張したことがありました。僕は、「オネエ」がお前と同じ学年のときは今のお前よりも早く寝たぞ（確か、4年生まで8時位に布団に入れていたような気がします）と指摘して、その不満をなだめようとしたのですが、下の娘は全然納得せず、「ズルイ、ズルイ」とずっとゴネておりました。それと同じような話で、年末に会った友人の家の携帯電話をめぐる議論があります。その友人の家庭では、一番下の女の子（中学2年生）が携帯を持ちたいと熱望しているのですが、上の二人（大学1年と高校2年）が自分たちは高校に入るまで携帯は持てなかったもので、絶対にダメだ、我慢しろと強く規制したそうです。時代は変わり、携帯をめぐる状況もどんどん変化しているのですが、そして当然携帯を持っている中学生はがぜん多数派になっているのですが、この家の上の二人の子は、いわば絶対平等を主張して、下の子の要求は家族会議で否決されたのです。そしてその友人が言うには、その友人宅においては、そのような学年進行の平等というか秩序は、実に厳密に守られているのだそうです。つまり、上の子が許された学年まで、下の子は絶対に待たなくてはならないのです。たとえそれが、携帯だろうが、映画だろうが、プリクラだろうがです。

さて、年が違う兄弟姉妹間でもこれだけ平等・公平への意識が高いとしたら、多胎児の場合は一体どうなってしまうのでしょうか？ どれだけ親が一生懸命に平等にしようと努めたとしても、完全な平等・公平は無理だからです。服装を例に取ってみてもこれはよく分かります。いつまでもいつまでも同じ服を着ているわけには行きませんし（普通、芸能人や特殊なケースを除いて、大人の多胎児が全く同じ服装をしているのは聞いたことがありません）、大体、男女の多胎児の場合は同じものを余り着ませんよね。ということで、食べ物やその他のことに関しても、やはり完全に平等にしてやるということは物理的には不可能だと思います。

僕は小さいとき、よく「マコちゃん（相棒の名前です）いいな、マコちゃんいいな」と相棒をうらやましがったそうです。でも、今から考えると何か不平等な扱いを受けた、あるいは不公平感があとに残ったということはありません。たぶん、そのとき何かしらの事情でちょっと不平等に思われたことがあったのかもしれませんが、生活の全体、生育の全体の流れの中でそうしたものが平均化され、不平等感が記憶として定着することはなかったわけです。不思議なことに、むしろ両親は平等に扱ってくれたなあという印象しか残っていません。そうした僕の経験から言っても、結局、大切なのはその場その場の完全な平等というよりも、平等に扱いたいという親の意思や姿勢、あるいは生育期全体を通じた相対的・平均的平等なのだと思います。そもそも、特に個性が育ってきた段階で、見かけ上の平等を維持したとしても、それではかえって不平等になってしまう恐れすらあります。ですから、あれこれ無理に公平を創り出すより、ゆったりと構えておおらかに行く方がずっと得策ですし、子どもたちにも安心感を与えるような気がします。

それと、これも是非書いておきたいことですが、生まれつき、多胎児というものはお互いに譲ったり、分け合ったりすることに慣れていきます。たとえ親が何かの拍子で何かを間違って不平等に与えてしまったとしても、こっちはこっちでちゃんとつじつまを合わせます。だから、ご安心を。

『ツインズふらす』第5号（多胎育児サポートネットワーク）から転載・修正